

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 27 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2010～2014

課題番号：22520527

研究課題名(和文) 認知言語学的アプローチによる日本語学習者(中国語母語話者)の語彙知識に関する研究

研究課題名(英文) A Cognitive Linguistic Approach to the Lexical Knowledge of Chinese Speakers Learning Japanese

研究代表者

鷲見 幸美 (SUMI, YUKIMI)

名古屋大学・国際言語文化研究科・准教授

研究者番号：50340211

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：中国語を母語とし、外国語/第二言語として日本語を学習する日本語学習者の語彙習得を、質(深さ)の面で支援するための基礎的研究である。学習者コーパスを対象として基本的な多義動詞の使用を観察するとともに、学習者が多義動詞の意味をどのように理解しているかを測るテストやタスクを行った。その結果、日本語学習者は、日本語教育において初級で導入されるような基本的な動詞であっても、その多義性を十分に習得できておらず、構造的な知識を有するには至っていない(意味のネットワークを構築していない)ことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study aims to find out how to support the acquisition of polysemic verbs by Chinese Speakers Learning Japanese. This study analysed how learners of Japanese use polysemic verbs and how much they understand multiple usages. As a result, it seems that they do not have structural knowledge of polysemic verbs.

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語教育 中国語を母語とする日本語学習者 語彙習得 多義語 動詞 認知言語学

### 1. 研究開始当初の背景

- (1) 第二言語習得の語彙知識に関する研究では、語彙知識は使用頻度の影響を受けて発達するが、その知識は上級学習者でも質の面で日本語母語話者とは異なることが明らかにされている。
- (2) 基本的な語の多くは多義語であり、その使用頻度の高さや使用範囲の広さから、日本語学習者にとって多義語の習得は重要である。しかし、日本語学習者にとって、多義語の習得は難しく、学習者は拡張義の意味理解や使用が不十分であることが指摘されている。
- (3) 認知言語学の言語理論、その枠組みを使った研究の発展は目覚ましい。しかし、その日本語教育への応用はなかなか進んでいない。
- (4) 認知言語学の使用依拠モデルでは、母語話者の言語知識は、具体的発話を基に、頻出言語表現とボトムアップ的にそれらを抽象化することによって抽出されるスキーマがネットワークをなして構築されていると考える。日本語学習者は多義語の拡張義の意味理解や使用が不十分だということは、そのネットワークが構築されていなかったり、限定されたものであったりする可能性があるが日本語学習者の構築しているネットワークの解明は進んでいない。

### 2. 研究の目的

- (1) 中国語を母語とし、外国語/第二言語として日本語を学習する日本語学習者の語彙習得を、質(深さ)の面で支援するための基礎的研究である。
- (2) 多義語に焦点を当て、日本語学習者がいかなる知識を有しているか、認知言語学的なアプローチにより明らかにする。

### 3. 研究の方法

- (1) 母語話者による基本的な多義動詞の使用を新聞記事を中心として収集し、内省に基づく分析に基づき、「比喻による意味の拡張」という観点から、各動詞の意味ネットワークを記述する。
- (2) 各種学習者コーパスを分析対象として、日本語学習者の多義語の使用を観察・分析する。
- (3) 話し言葉のコーパスを分析対象として、日本語母語話者の多義語の使用を観察・分析する。
- (4) 日本語学習者と日本語母語話者を対象として、「出る」「入る」について、質問紙調査とカード分類タスクを実施し、その結果を分析する。

### 4. 研究成果

- (1) 実例と内省に基づいて、基本的和語動詞(多義動詞)の意味を、理論的プロ

トタイプを中心とした拡張関係とスキーマ関係に基づくネットワークとして記述した。

- (2) 日本語学習者の基本的和語動詞の使用実態を既存の各種学習者コーパスを対象に観察したが、学習者の日本語レベルの判定が一樣ではなく、レベル判定をしていないものもあるため、コーパスごとの把握に留まった。基本的に、使用頻度が相対的に高い多義動詞に関しては、レベルが上昇することにより、より多くの語義で使用するようになるが、レベルが高くなっても使用する語義は限定的なものであるという傾向が見られた。また、使用頻度が相対的に低い多義動詞については、必ずしもレベルの上昇により使用語義が広がるとは言えないことがわかった。さらに、親密度の高い語義の使用、共起頻度の高いコロケーションの使用が先行することや母語の影響があることも明らかになった。つまり、学習者は「ボトムアップ的なスキーマの抽出によるネットワークの構築」が進んでいないことが示唆された。
- (3) 日本語母語話者の基本的和語動詞の使用実態を話し言葉のコーパスを対象に観察した結果、母語話者であっても日常的な会話で使用される語義は極めて限定されていることが明らかになった。また、必ずしも具体性の高い語義の使用頻度が高いわけではないこと、使用されるコロケーションに偏りが見られることも明らかになった。
- (4) 日本語学習者を調査対象とし、「出る」「入る」を調査項目とした語彙テスト及びカード分類タスクにより、一般的な(量的な)語彙力の向上とともに多義語の知識もある程度豊かにはなるが、意味の理解は非常に限定されていて、「未知の語義」を推測することができないことが明らかになった。カード分類タスクの結果は、学習者間の相違が大きく、中国語を母語とする学習者の一般性を見出すことができなかった。相対的に語彙力の高い学習者であっても、「出る」「入る」の多義性を十分に習得できておらず、構造的な知識にはなっていないことが示された。また、相対的に語彙力の低い学習者にとっては、語彙テスト、カード分類タスクともに難易度が高すぎて、その知識を十分に測れなかった。
- (5) 日本語母語話者を調査対象とし、「出る」「入る」を調査項目としたカード分類タスクにより、母語話者間においても構築しているネットワークに相違があることが明らかになった。必ずしも具体性の高い語義(理論的プロトタイプ)を中心に「出る」「入る」の知識を構築しているわけではないことが明らかになった。

(6) (2)(3)(5)を踏まえ、理論的プロトタイプを中心としたネットワーク(成果(1))の提示は、日本語学習者の多義語習得支援には必ずしも有効ではないことが示唆された。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

鷺見幸美(2014)「中国語を母語とする日本語学習者の和語動詞の使用-KY コーパスの分析-」『言語文化論集』第36巻第1号、65-79. 査読なし

鷺見幸美(2015)「中国語を母語とする日本語学習者の多義動詞の使用-KY コーパスに見られる使用語義の広がり-」『言語文化論集』第36巻第2号、81-96. 査読なし

鷺見幸美(印刷中)「多義動詞「カケル」の学習についての一考察 話し言葉における日本語母語話者の使用実態を踏まえて-」『日語教育と日本学』第6輯、華東理工大学出版社. 査読なし

[学会発表](計7件)

鷺見幸美「日本語学習者の和語動詞の使用について-KY コーパスに見られる移動動詞-」華東政法大学・名古屋大学日本学合同研究会、華東政法大学、2012年1月14日.

鷺見幸美「KY コーパスに見る中国語話者の日本語和語動詞の使用」2014年華南理工大学・名古屋大学合同中日言語文化研究会、華南理工大学、2014年3月4日.

鷺見幸美「日本語学習者による和語多義動詞の使用-KY コーパスにみられる使用語義の広がり-」2014年日本語教育国際研究大会(SYDNEY-ICJLE2014)、シドニー工科大学、2014年7月11日.

鷺見幸美「中国語を母語とする日本語学習者による移動動詞の使用-KY コーパスに見られる使用語義の広がり-」第10

回国際日本語教育・日本研究シンポジウム、香港大学專業進修学院、2014年11月16日.

鷺見幸美「インタビュー発話に見る日本語母語話者による多義動詞の使用 日本語教科書における「カカル」「ツケル」の扱われ方と比較して-」2015年上海財経大学・名古屋大学合同中日言語文化研究会、上海財経大学国定路キャンパス、2015年3月21日.

鷺見幸美「インタビュー発話に見る日本語母語話者による多義動詞の使用 日本語学習者の運用のための「カケル」の記述を視野に-」2015年「日本言語文化研究」学術研究会;東華大学・名古屋大学・上海外国語大学、東華大学延安西路キャンパス、2015年3月22日.

鷺見幸美「インタビュー発話に見る日本語母語話者による多義動詞の使用 日本語教科書における「カカル」「ツケル」の扱われ方と比較して-」2015年言語文化学術交流会;上海師範大学・名古屋大学、上海師範大学東部キャンパス、2015年3月23日.

[図書](計0件)

[産業財産権]  
出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鷺見 幸美 (SUMI YUKIMI)

名古屋大学・大学院国際言語文化研究  
科・准教授

研究者番号：50340211

(2) 研究分担者

なし ( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ( )

研究者番号：